

八代市立博物館・八代市立図書館共催
学芸員のこだわり八代学@市立図書館

第1回 八代城主松井家と熊本の能



八代城内の能舞台

「八代宮遷宮図」(明治23年・1890)の本丸部分 八代市立博物館所蔵

令和7年5月17日(土)

八代市立博物館未来の森ミュージアム 学芸員

山崎 摂

本日お伝えしたいこと

Point① 八代城主松井家には、全国的にもすぐれた能楽資料が残っている。

point② 八代城主松井家における能の歴史を見ていくと、熊本の能の歴史に大きく関わっていることがわかる。

point③ 八代の人々も、能とのかかわりが深かった。

能とは？

- ・面と装束を用い、専用の舞台上で上演される歌舞劇。
- ・室町時代(14世紀)に成立し、650年を超える歴史がある。
 - ・独自の様式を磨き上げてきた日本を代表する舞台芸術。
 - ・昭和32年、国重要無形文化財に指定。
- ・2008年、ユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に登録。
 - ・「能」と「狂言」を合わせて「能楽」と呼んでいる。

能の歴史をおさらい

■ 能の源流

- ✓ 奈良時代、大陸から曲芸・歌舞、物まねなど雑多な内容を含む**散楽**が伝わった。
- ✓ 平安時代に笑いの要素を中心とする芸能に発展し「さるがく・さるごう」（**猿楽**、**申楽**）と呼ばれた。これが**狂言の源流**となる。
- ✓ 一方、寺院の法会における**呪師猿楽**、神社の神事における**翁猿楽**を行う座が発展して、歌舞劇を演じるようになったと考えられている。

■ 観阿弥・世阿弥の登場

- ✓ 南北朝時代、大和猿楽の**円満井座**、**坂戸**、**外山**、**結崎座**の活躍が目立つようになり、これがのちに**金春座**、**金剛座**、**宝生座**、**観世座**となった。
- ✓ 室町時代、結崎座の**観阿弥**（1333～84）が将軍足利義満の愛顧を受けて京都に進出し、能の芸風を優美なものへ発展させ、その子**世阿弥**（1363～1443）が、より芸術性の高い舞台芸術へと高めた。とくに**夢幻能**という様式を完成させ、『風姿花伝』をはじめ20種に及ぶ能の理論書を著述した。

能の歴史をおさらい

■幕府の式楽となる

- ✓ 桃山時代の豊臣秀吉は大の能好きで、能役者の保護に気を配った。
- ✓ 江戸時代になると、大和猿楽の四座は幕府の直接支配下に入り、その典礼の能を勤めることが第一の任務となった（式楽）。このころ、喜多七大夫が一流（喜多流）の創立を許され、**四座一流**と称された。
- ✓ 地方の有力諸藩も、幕府にならって四座一流の弟子筋の役者を召し抱え、舞台や道具の整備につとめた。
- ✓ 一方、町人たちが能に接する機会は「勧進能」や「町入能」に限られていたが、「謡本」の普及によって、謡が全国的に広がった。

■明治以降の能

- ✓ 明治維新により猿楽の役者たちは失職し、存続の危機を迎えた。
- ✓ 明治14年（1881）能楽の保存と発展を目的とする能楽社が設立。明治23年（1890）能楽堂と改称、明治29年（1896）能楽会設立。大正10年（1921）能楽師の団体である能楽協会設立（1938年に能楽会と合併）。昭和20年（1945）**社団法人能楽協会**設立。**昭和32年（1957）「能楽」が重要無形文化財**に総合指定され、指定者40名による**社団法人日本能楽会**発足。

能の現在

■ 能の流派

シテ方五流…	観世流、金春流、宝生流、金剛流、喜多流
ワキ方三流…	宝生流、福王流、高安流
狂言方二流…	大蔵流、和泉流
囃子方十四流…	笛方三流（一噌流、森田流、藤田流） 小鼓方四流（幸流、幸清流、大倉流、観世流） 大鼓方五流（葛野流、高安流、大蔵流、石井流、観世流） 太鼓方二流（金春流、観世流）

✓ 能楽協会 正会員 約1,100人（2020年2月現在）
1,185人（2016年3月） 1,338人（2010年8月）

✓ 日本能楽会（重要無形文化財「能楽」保持者より構成）
各個認定（人間国宝）12人（2023年度現在、累計47人）
総合認定保持者 565人（2023年度現在、平成16年女性も指定）

■ ユネスコ無形文化遺産に登録

2001年「**人類の口承及び無形遺産の傑作宣言**」
2003年ユネスコ総会で「無形文化遺産保護条約」が採択（2006年発効）
2008年「人類の無形遺産の代表的な一覧表」に「能楽」が記載される。

能とは、専用の舞台（**能舞台**）で、仮面（**能面**と呼ばれる）をつけ、専用の舞台衣装（**能装束**と呼ばれる）を着て、**囃子方**（笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種がある）の伴奏で、台本（**謡本**と呼ばれる）の詞章を謡いながら、舞う歌舞劇である。シテ方、ワキ方、笛方、小鼓方、大鼓方、太鼓方があり、それぞれに流派がある。



▲市博物館で展示した能面・能装束・楽器など（松井文庫所蔵）

▼令和6年8月3日 熊本・出水神社能楽殿での薪能「田村」



▲八代城内にも、かつて能舞台があった。



明治23年(1890)に描かれた「八代宮遷宮図」本丸部分



八代宮

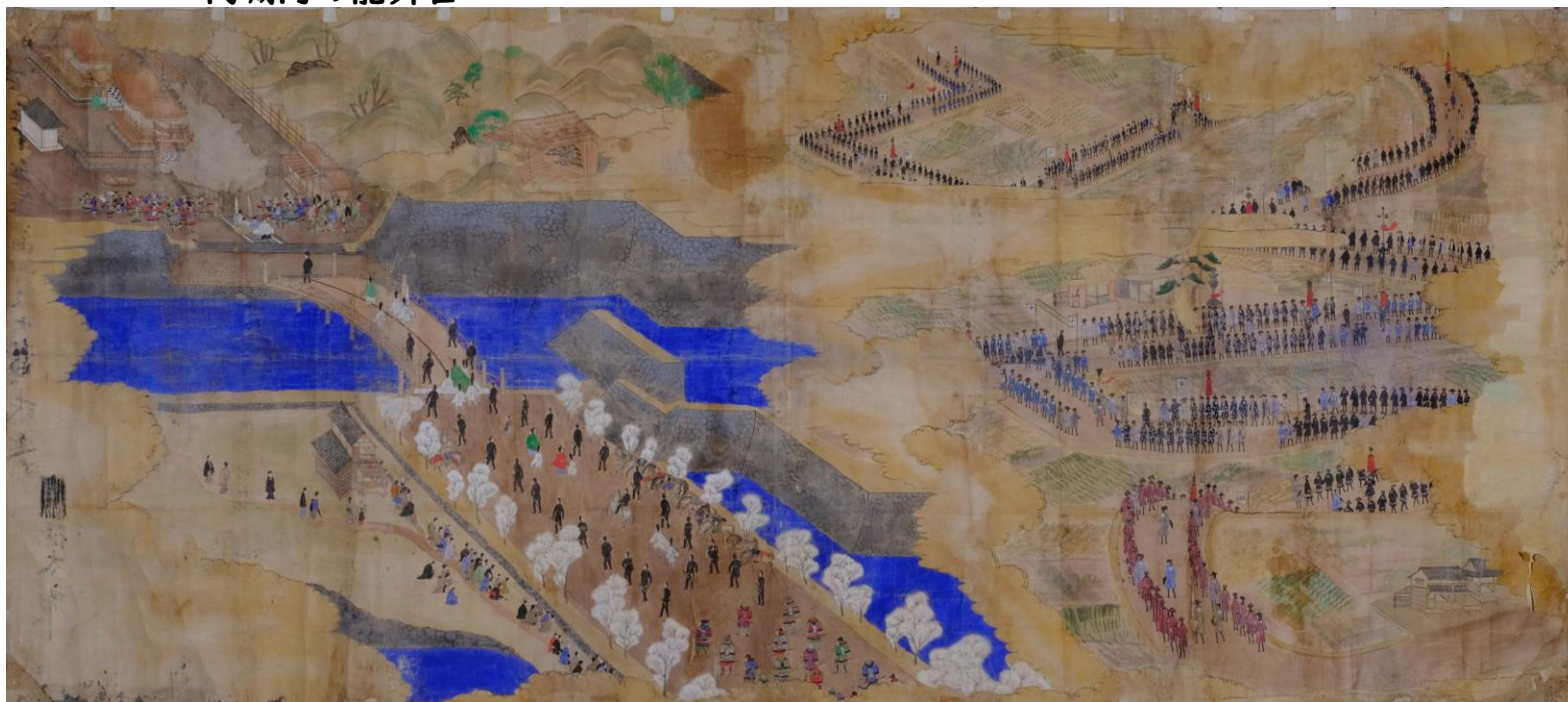
明治13年 官幣中社に列せられる

明治16年 社殿落成

明治17年4月20日

祭神懷良親王の御鎮座大祭が行われる

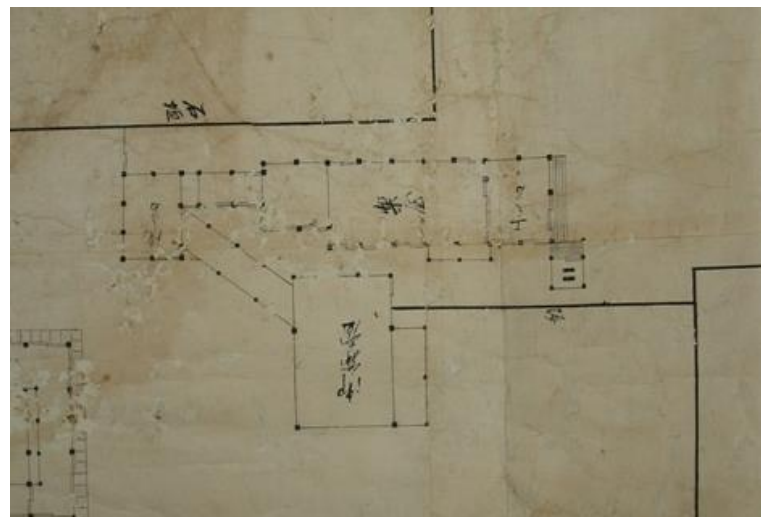
八代城内の能舞台



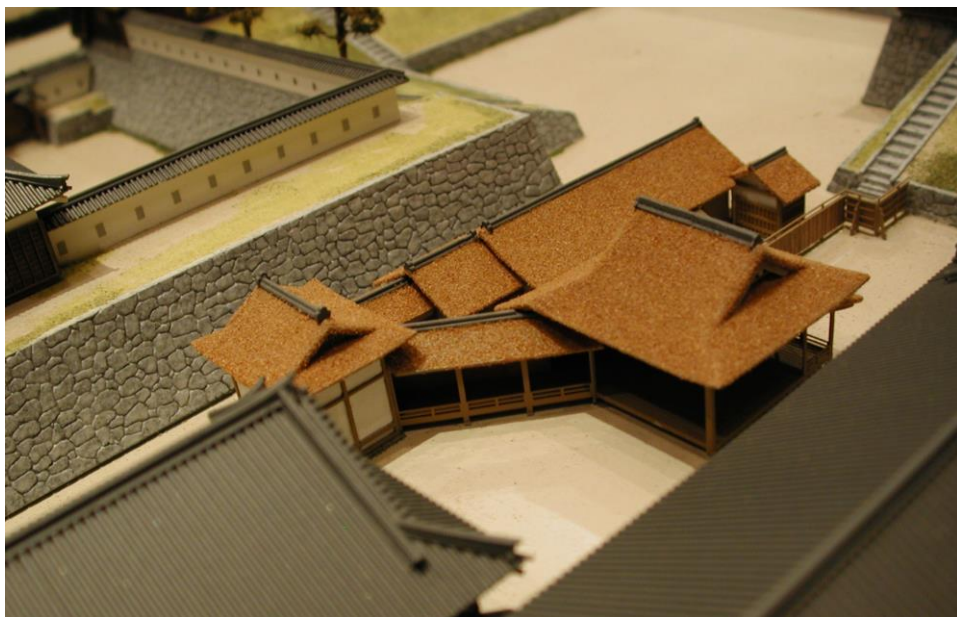
八代宮遷宮図(明治23年・1890)本丸部分 縦189.0cm 横436.0cm 八代市立博物館所蔵



八代城内の能舞台



「八代城間取図」(江戸時代後期) 部分
八代市立博物館所蔵



博物館の「八代城城郭模型」に再現された八代城の能舞台

細川三斎が八代城入城後の
寛永10年(1633)、
「本丸ニ先代より舞台御座候
をも御建直、式正の舞台ニ被
成、…」とある。
(『八代市史近世史料編Ⅷ
松井家先祖由来附』)

『八代市史 第4巻』によれば、八代城の能舞台は、三斎が自ら松を描いたとされているが、出典は不明。八代城廃城後、この舞台がどうなったのかわからない。



八代宮遷宮図(明治23年・1890)本丸部分 縦189.0cm 横436.0cm 八代市立博物館所蔵

熊本市・水前寺成趣園の能楽殿



松井家の家紋である
三ツ笹紋の瓦で葺
かれている。

現在、水前寺成趣園（出水神社）にある能舞台は、昭和61年（1986）、八代松井家から移築されたもの。この舞台は、昭和9年、八代の豪商弓削家から譲り受けたもの。八代城にあった能舞台との関連は不明である。



水前寺成趣園（出水神社）の能楽殿では、毎年8月第1土曜日に薪能が行われる。



附
祝
言

後見

上村恭徳
本田芳樹

村上芳明
松下謙一郎
中山孝英

山田政巳
本田布由樹
東軍三

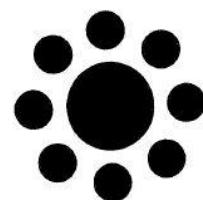
ワキツレ 橋本 宰

能田村
ワキ 飯富雅介

(大) 白坂 信行
(小) 古田 寛二郎

(笛) 内田 秋則

前シテ 網谷 洋志
後シテ 田中 秀実



第63回

金春流

出水神社 新能

と き 令和6年8月3日(土)午後 5 時30分開場 午後 6 時開演

ところ 水前寺成趣園内 出水神社能楽殿 (雨天決行)

主催 出 水 神 社

協力 金 春 松 融 会

協賛 熊本県文化協会
熊本国際観光コンベンション協会

後援 熊本県文化協会
熊本日日新聞社
熊本放送局
NHK熊本放送局

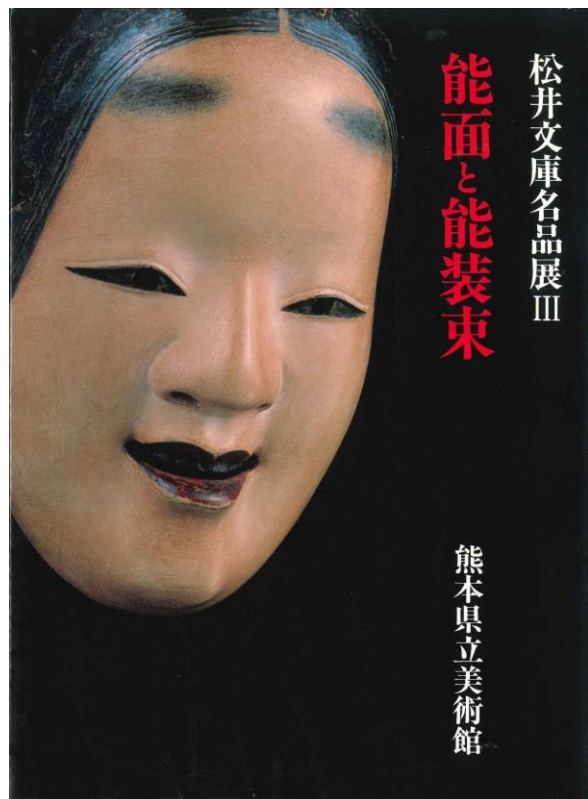
観 能 無 料

拝観料 (入園料) は午後 5 時30分以降無料

令和6年8月3日の番組表「金春松融会」のホームページで公開されているもの
松井家ゆかりの能舞台が、今も熊本の能楽界を支えている。

Point① 全国的にもすぐれた能楽資料

八代城主松井家に残る能関係資料



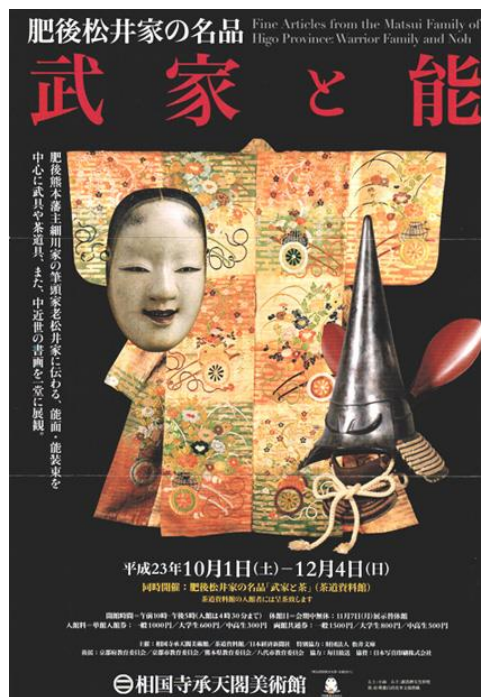
(左) ☒ 平成23年10月 京都・相国寺承天閣美術館にて「肥後松井家の名品 武家と能」開催（能面15面・装束18領含む120件）

(右) ☒ 平成27年1月 東京・国立能楽堂にて「松井家の能」開催（能面52面・装束27領含む98件）

☒ 昭和59年に財団法人松井文庫設立され、熊本県立美術館が調査を始める。

☒ 平成2・3年度 能面・能装束調査が行われる。能面108面、装束300点余、楽器・謡本などを確認。

☒ 平成4年2月「松井文庫名品展Ⅲ 能面と能装束」展開催（能面45面・装束45領を含む135件が展示）



point① 全国的にもすぐれた能楽資料

東京・国立能楽堂の特別展「松井家の能」

国立能楽堂での展示風景（松井文庫が所蔵する能面・能装束・楽器、謡本など98点を展示）



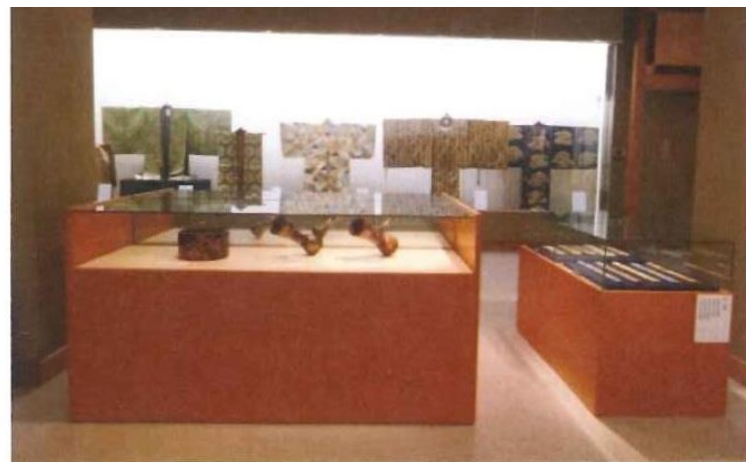
⑩A展示左側



⑨A展示右側



⑬B展示 左方向より



⑳手前E展示 奥C展示

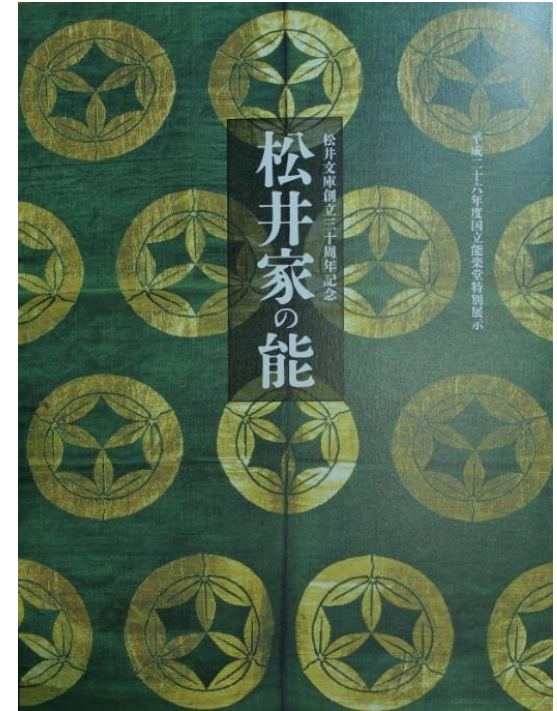
point① 全国的にもすぐれた能楽資料

東京・国立能楽堂の特別展「松井家の能」

平成27年1月7日～3月7日開催

本展ちらしの説明文によれば、

「・・・松井家の能は主家である
細川家の能と相即不離の存在
として、桃山時代以降の日本の
能の歴史の一支柱を為すもの
と、かねてより注目されていま
す。」



国立能楽堂発行展示図録
「松井家の能」

A4版 85ページ

2,570円

point② 松井家における能の歴史

(1) 初代松井康之(1550~1612)

- ✓ 細川家が丹後国を領していた時代の演能記録「丹後細川能番組」が残っており、細川忠興を中心として、丹後国田辺城、宮津城周辺で盛んに能を催していたことがわかる。
- ✓ 天正11年～慶長4年(1583～1599)にかけて催された演能回数は50回に及び、計433番の番組が収録されている。
- ✓ 松井康之は、天正12年(1584)田辺円隆寺で(野々宮)のシテ(当時35歳)、翌年宮津城有吉立行邸で「柏崎」のシテ、「当麻」のツレ(シテは忠興)、天正17年(1589)には宮津城二の丸の自邸で演能。
- ✓ 康之の長男興之は天正13年(1585)「猩々乱」のシテ(10歳)、以降シテ12回、ツレ(子方)4回を演じている。

point② 松井家における能の歴史

(2) 二代松井興長(1582~1661)と能

松井興長起請文 寛永5年(1628) 中村家所蔵

長岡(松井)興長が、中村政長に能の相伝を受けるにあたり、約束事を誓った史料が残っている。

(3) 四代松井直之(1638~1692)と能

寛文8年(1668)、熊本・祇園社(現在の北岡神社)へ能面12面を奉納したことが記した箱が、能面とともに当社に残っている。

細川家の筆頭家老として、率先して能を習い、演じ、学ぶとともに、寺社へ能面を寄進するなど、細川家中・藩内の能の興隆に配慮している様子がうかがえる。

一方、細川家が入国する前の熊本では、能は行われていたのか？

八代ではすでに能が行われていた！

- ✓ 永正元年（1504）～天正9年（1581）、当時の八代城（古麓城）には相良氏が在城した。
- ✓ 文明14年（1482）～永禄9年（1566）の出来事が記された相良氏の記録が残り、「八代日記」と呼ばれている。

（慶応義塾大学図書館所蔵「相良家文書」国指定重要文化財）

天文5年（1536） 閏10月18日

右衛門大夫、陣内ニテ御能仕候、すほうぬき

すほうぬき = 素襖脱ぎ

貴人が着ている衣服を脱いで褒美として役者に与えること。

今のところ、熊本で能が行われた最も古い記録

「八代日記」に見える能の記録

天文5年（1536）閏10月19日 （菊池）義宗、陣内ニ御光儀、能御覧候

天文7年（1538）1月29日 義宗、陣内ニ御光儀ニテ御能御覧候

天文8年（1539）2月5日 陣内ニテ御能仕候、同八日ニ（菊池）則治為御能見物ニ御出

天文10年（1541）2月2日 則治、御能見物として陣内ニ御光儀候

天文11年（1542）1月27日 陣内ニテ御能仕候、同18日 礼能、屋形様御父子御光儀候

天文14年（1545）2月7日 右衛門太夫、法樂之能仕候、

2月11日 陣内ニテ右衛門太夫御能仕候、

2月12日 兵衛太夫、陣内ニテ主の代次の翁わたし候、

2月15日 寺家能、莊嚴寺ニテ仕候

天文18年（1549）10月13日 （前略）ミそこしまい太輔、タタノ満仲、屋島ニ番申候、

天文21年（1552）10月24日 兵衛太夫上洛、下向之後、始八代下陣内ニテ御能仕候、

10月28日 兵衛太夫、寺家能莊嚴寺ニテ仕候、

天文23年（1554）7月3日 陣内ニテ能仕候て、御会尺、能五番仕候、相生・兼平・松風・
たへま・羽衣如此にて候

永禄4年（1561）閏3月9日 天満宮法樂、町衆正法寺ニテ能仕候

16世紀の八代城下では盛んに能が行われていた。

熊本の能（細川家以前）

■天正14年（1586）9月8日 島津義久、八代正法寺で京都の能役者渋谷与吉郎、対馬丞親子を呼び寄せ、翁付七番の能を興行。翌年、秀吉の九州平定により義久は薩摩に退き、降伏。

■文禄2年（1593）5月10日 加藤清正、肥前名護屋城で「箴」を演じる。このとき秀吉は「源氏供養」「吉野」を演じる。

✓ 加藤清正、慶長9年（1604）頃から、秀吉が特に最厚にした**金春安照**（1549～1621）、下間少進の演能に出向き、同11年には観世父子を招いて莫大な引き出物を与える。

✓ この頃、秀吉に仕え、金春安照に弟子入りし、慶長15年（1610）安照から相伝を受けた**中村政長**（1572頃～1644）を大小姓組（使番）五百石で召抱える。

✓ 慶長11年（1606）年頃から、**藤崎八幡宮の祭礼復興**を図り、隋兵式と**能の奉納**をはじめめる。

能の奉納は、現在も続いている。(毎年9月16日、令和6年は415回目)



藤崎八幡宮御旅所の能楽堂



藤崎八幡宮秋季例大祭
段山の御旅所で神事能が行われる。

KAB 令和6年9月16日放送
「暑さとの戦い 幾重にも装束重ね 伝統の能を奉納」

令和6年9月16日の御能組
藤崎八幡宮のホームページに公開されているもの

■熊本の本座・新座

中世、祇園社（現北岡神社）に仕えた舞楽座が、**本座**（友枝氏）と**新座**（伊津野氏）に分かれ、能を行うようになる。

✓ 本座の友枝源蔵、寛永5年（1628）、中村政長に入門して芸を修め、金春流となる。（のちに喜多流に転じる。）

✓ 寛文8年（1668）、桜間木工助、中村家に入門し、延宝2年（1674）新座太夫となる。

■中村政長の活躍

✓ 寛永4年（1627）頃から、諸大名の間を行き来して能を教える。

細川忠利、忠利兄（長岡休無斎）、忠利妻の兄（小笠原忠真）らが入門。他に永井伝十郎（幕臣）、浅野長重（備前笠岡藩主）、中山照守（幕臣）、松平忠鎮（徳島藩主）、浅野長治（備後三次藩主）、森忠政（津山藩主）など。

✓ **寛永5年、長岡式部少輔（松井興長）も政長に入門。**

能を通じた人脈づくり・情報収集に有用な人物だったといえる。

point② 松井家と熊本の能のかかわり

■寛永9年（1632）、加藤家の改易により、浪人となった中村正辰（政長の子）の獲得に動いたのが松井興長。細川家に千石で召抱えることに成功する。

■金春安照の相伝を受けた中村政長・正辰父子の獲得は、その後の細川家の能に大きな影響を与えた。興長の功績といえる。

✓ 加藤家の改易により、熊本藩主となった細川家は忠利が熊本城に入り、隠居の身であった父三斎（忠興）は八代城に入った。

✓ 正保2年（1645）三斎が八代城で没すると、筆頭家老をつとめる松井興長が八代城に入り八代城を預かることとなった。

以降、明治まで松井家が八代城主をつとめた。

(4) 十代松井章之 (1813~1887) と能

- ・文化10年(1813) 十月二四日、松井家8代徴之三男として生まれる。
- ・文政3年(1820) 8歳 松井家9代督之の養子となる。
- ・文政11年(1828) 16歳 元服し式部に改名。国政見習。
- ・天保3年(1832) 20歳 家老職に就任。大組を預かる。
- ・天保9年(1838) 26歳 細川長門守興建養姪琴と婚姻
- ・天保10年(1839) 27歳 長女加屋誕生。この年、病身を理由に大組を免じられる。
- ・天保12年(1841) 29歳 家督相続し、御礼のため江戸へ参府し、将軍に拝謁。
- ・嘉永元年(1846) 36歳 夫人の琴、36歳で死去。
- ・嘉永6年(1853) 41歳 春光寺を修復
この年、西洋式砲術高島流砲術を池辺啓太より皆伝。
- ・安政3年(1856) 44歳 将軍代替りにつき江戸参府。
- ・文久3年(1863) 51歳 家督を盈之に譲る。
- ・明治6年(1873) 61歳 植柳村の別荘栽柳園に移る。
- ・明治20年(1887) 75歳 6月21日死去。



「天保十二年在城日記」12月15日の条

(天保12年12月)

十五日 晴

一当春より流れ懸けおり候家督祝能に此節首尾よく下着祝能取り結び、今日**表舞台**にて祝能催し候、熊本より両座太夫はじめ、狂言も両座太夫はじめ申し談じ、呼び寄せ候、番組左の通り

高砂(勘兵衛) 八嶋(□三郎) 羽衣(仙吾)

自然居士(右陣) 邯鄲(仙吾) 鉢木(右陣)

小鍛路(角太郎)

末広(儀兵衛) 宗論(芸右衛門) 業平餅(順兵衛)

三人片輪(半兵衛) 石神(芸右衛門)

禰宜山伏(□三郎)

右の通りにて朝五つ時より相始まり、夜四つ時過ぎ滞りなく相済み候、

家督祝の能(能7番、狂言6番)

朝8時から夜10時までかかった。

「天保十二年在城日記」12月17日の条

(天保12年12月)

十七日 朝少し雨、□□晴

一去る十五日に祝能に参り候両座太夫初め留め置き、今日遊覧能致せ候、番組左の通り

国栖(角太郎) 実盛(仙吾) 百万(勘兵衛)

俊寛(右陣) 通小町(仙吾) 是界(右陣)

枕慈童(孫七) 融(徳三郎)

栗田口(儀兵衛) 寝音曲(順兵衛) 栗焼(芸右衛門)

舍弟(八代子共達) 内沙汰(芸右衛門) 二人大名(八代連)

仁王(□三郎)

右の通りにて四つ時分より相始まり、夜四つ半時分相済み候、御先代迄は右様の御遊覧能などの節は、御平服にて、
拝見の面々も同様残らず平服にてこれあり候、

この節よりは勿論一統は已然通りにて、家司共は朔日十五日は当時も肩衣着用も致し候身分につき、肩衣着用に申付け候、

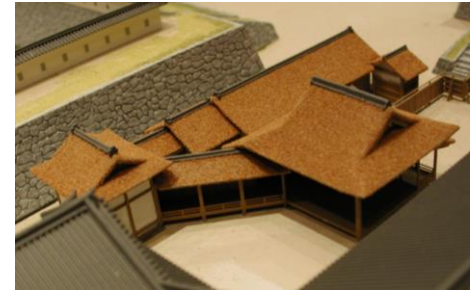
さてまたそれがしも遊覧の節は簾の内より見物致し候様に相決め候、上の御遊覧の節も御出座はあそばされず、簾之内よりご覧あそばされ候につき、ここの儀もその御見合いにて、この節より右の通り初め候

遊覧能(能8番、狂言7番)

朝10時から夜11時半までかかった。

「天保十二年在城日記」からわかること

- ・ 天保12年12月15日・17日、家督相続と江戸参府の無事終了を祝う能（祝賀能）が八代城で行われた。
- ・ 両座（本座・新座）の太夫が勤めた。
- ・ 番組等について、事前に新座太夫（桜間）右陣と打合せをした。
- ・ 今回、江戸で仕直したり、買い入れたりした能衣裳類を右陣に見せた。
- ・ 子供たちにも、幼い時から能を学ばせている。
- ・ 他の細川家臣の家に能を見に行くこともあった。
- ・ 能衣装は、拝領することもあったらしい。



四月十五日

一今日織部隠居家督の節、**拝領の能衣裳、着初め**の能、本宅にてこれあり候について、それがし、その時分は江戸詰め内にて世話いたしたるべく候につき、今日案内これあり、今朝紙面送られ候につき、早引きいたし、見物に参り候、夕七つ時過ぎにあい済み、程なく帰り候、

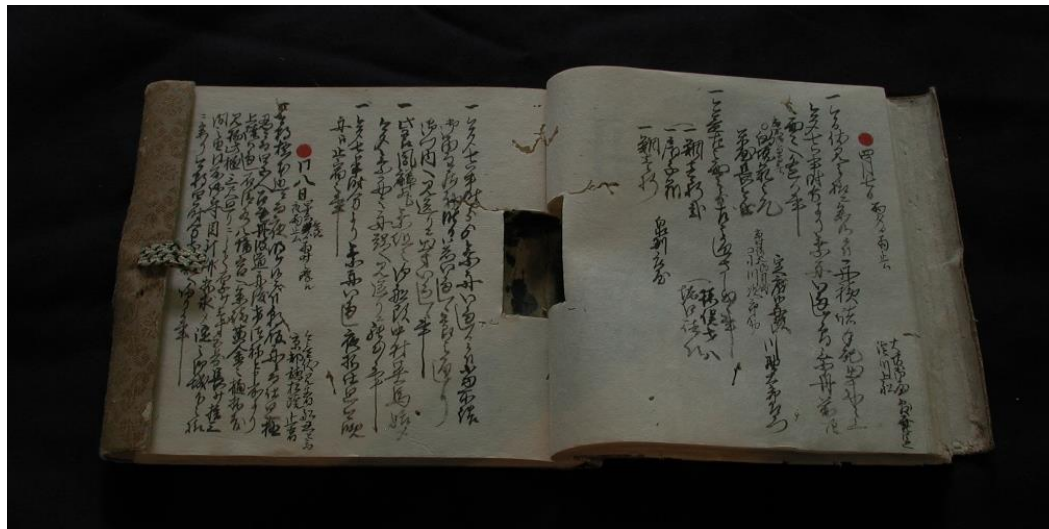
松井家の江戸参府

✓ 松井家は、細川家の家老でありながら、幕府からも知行地を与えられており、自家と将軍の代替わりには、江戸へ行き、将軍に拝謁（御目見え）することになっていた。

✓ 参府の道中、松井章之自身が記した日記が残っており、途中、様々な名所旧跡を訪れている。その中に、能ゆかりの地（謡蹟）も多く含まれている。

（『松井章之の江戸旅行日記』（八代古文書の会 2008年）

高砂の相生松、敦盛墓、須磨寺、松風・村雨の汐鳴松、石山寺、三保の松原など



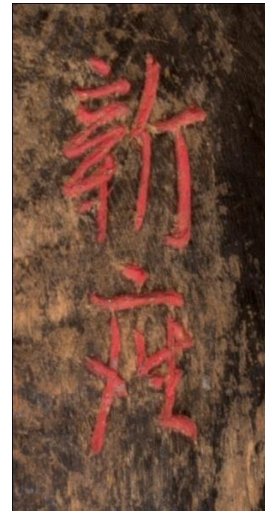
■松井文庫所蔵面の銘文や刻印からわかること



能面「三光尉」



能面「瘦男」



能面「山姥」



能面「浅井」

「韃負」は中村政長及び正辰の名

「新座」の桜間家が用いたものか



側面
面符

三光尉、顰、小飛出、真角、千種怪士、
猩々、頼政、景清、泥眼、月の深井、
般若等の15面に刻まれる。

細川家（永青文庫）にもこの印を持つものが33
面ある（163面中）。

point② 松井家と熊本の能のかかわり

松井文庫所蔵能面の価値

細川家、新座、本座との関連をうかがわせるものが多く、細川家や藩内で行われた公式行事や私的な祝い事の際に行われた演能に持ちいられたとみることができる。

熊本の能楽史そのものを物語る作品群といえるのではないか。

さて、熊本出身の能役者たちの活躍が…

松井章之が安政3年の江戸参府に同伴した桜間右陣の子伴馬（後の左陣）は、明治三名人の一人として明治期の能楽界を支えて活躍する。

櫻間伴馬（左陣）の活躍

■櫻間伴馬（さくらま ばんま）1835（天保6）～1917（大正6）

シテ方金春流。伴馬は初名。1911年喜寿を記念し、左陣と改名。

喜多流の友枝家とともに熊本の細川藩に仕えた名家である櫻間家の17代目。21歳のとき、藩命により江戸へ出、金春流地謡方の中村平蔵に師事、数年滞在して帰省、ふたたび江戸に上ったときに維新に遭遇して下国、1879年（明治12）細川護久の勧めで三度目の上京をして以後東京に永住。

充実した気迫と鮮烈な型は他の追隨を許さず、16世宝生九郎、初世梅若実とならんで明治の三名人とうたわれ、晩年まで至芸を見せた。《道成寺》《俊寛》《邯鄲》などの能を得意としたが、鬘物の幽艶さでも類を絶したという。明治期に衰微していた金春流を背負って立ち、宗家の金春光太郎（のち八条）・栄治郎兄弟を守って盛り立てた功績は大きい。嗣子は櫻間弓川。」

『能・狂言事典』（平凡社 1987年）

松井祥之氏の功績

大正12年（1923）生まれ。4歳頃より能の稽古を始める。師は櫻間左陣の高弟藤本理三。8歳で「猩々」のシテで初舞台。櫻間弓川、本田秀男、櫻間道雄に師事。

昭和6年（1931）松井家能舞台にて細川護立公の「融」上演をを記念して「松融会」発足。学習院中等科、高等科、東京帝国大学文学部美学科に進むが、学徒徴集で熊本第16部隊に入隊。

終戦後、松融会復興に尽力。昭和30年（1955）金春流能楽師範。昭和35年（1960）出水神社にて第1回薪能開催。昭和45年（1970）金春松融会理事長就任。昭和46年（1971）熊本県能楽協会会長就任。

昭和50年（1975）重要無形文化財能楽保持者に認定。日本能楽会会員となる。昭和57年（1982）7月死去、享年59歳。

■櫻間弓川（さくらま きゅうせん） 1889（明治22）～1957（昭和32）

シテ方金春流。櫻間伴馬の次男。初名は金太郎。1894年《三井寺》の子方で初舞台、1901年《船弁慶》で初シテ。父の薫陶を受け、巧緻な謡と鮮麗な型をもって東京の金春流のみならず、**大正・昭和の能楽界を代表する一人であった**。《望月》《安宅》

《石橋》《乱》の舞台は、ことに名演とうたわれた。1950年弓川と改名。55年、老女物の秘曲《関寺小町》をつとめた。1951年度芸術選奨文部大臣賞（**能界初**）、52年日本芸術院賞、53年度芸術祭大賞を受賞、57年日本芸術院会員となる。櫻間金太郎（本名竜馬、1916～）はその長男。

■櫻間道雄（さくらま みちお） 1897（明治30）～1983（昭和58）

シテ方金春流。櫻間林太郎（櫻間伴馬の末弟）の次男。はじめ父に師事し、1913年上京後は伯父の伴馬および従兄弟の金太郎（弓川）について修行。堅確な技術をもって早くから実力を評価されていたが、花開いたのは60年代以降で、巧緻・艶麗な芸風に自己の研鑽と主張を積み重ね、高度な技術様式を獲得した。あらゆる曲趣に秀でていたが、とくに《定家》《江口》《西行櫻》などが名演として知られ、老女物の秘曲《檜垣》を2回、壮者の体力と集中力を要する《道成寺》を70歳と84歳で舞うなど、老いを感じさせぬ意欲と探求心を示した。1960年度・67年度芸術祭大賞。69年度芸術選奨文部大臣賞受賞。70年、**重要無形文化財保持者各個指定（人間国宝）に認定される**。著書に『能・捨心の芸術』。

『能・捨心の芸術』には、櫻間道雄氏が昭和46年水道橋能楽堂で演じた「檜垣」の舞台写真が掲載されている。そのとき着用している能装束が、現在、永青文庫及び松井文庫に現存している。

Point① 全国的にもすぐれた能楽資料

松井文庫所蔵能面・能装束の価値

細川藩内にとどまらず、近世から近代にかけて、重要な能楽シーンを彩った貴重な作品群である、といえるのではないか。

早くから、名品としてよく知られていた存在ではなかったか。

その証拠、といえるものが次の資料です。

特別展覧会 能面と能装束展

昭和39年（1964）10月

於：京都国立博物館

160点の能装束が展示され、うち13領が松井家からの出品。

東京オリンピックが開催された年、国の博物館が開催する展覧会は、日本の最高水準の文化を世界にアピールするねらいがあった。そこに八代松井家から多くの出品があったことはおおいに誇るべき。



Point① 全国的にもすぐれた能楽資料

松井家伝来能面・能装束の魅力

各作品の魅力はもとより、松井家や細川家を取り巻く近世から近代にかけてのわが国の能楽史を彩った作品群である。

国立能楽堂による評価

「・・・松井家の能は主家である細川家の能と相即不離の存在として、桃山時代以降の日本の能の歴史の一支柱を為すものと、かねてより注目されています。」

国立能楽堂での展示内容を八代市博で再現（能面・能装束・楽器、謡本など98点を展示）

[illegible]

平成30年4月20日～6月3日開催（観覧者数 3,344人）

point③ 八代の人々と能のかかわり

八代城下町の人々が謡初に参加

『八代市史近世史料編目 御町会所古記之内書抜 下巻』

「天明八年（一七八八）正月三日之控」

（前略）

一、今夕七半時揃にて、**御城松囃子**仰せ付けられ候に付、**町役者**中去年の通り、罷り出で候、尤も拙者宅え相揃麻上下にて召し連れ、頼当御門より罷り出で、内玄関より引き上げ、落間南長間え通し、取調べ等致し候、御道具等御近習より出方に相成り候手付けも召し連れ申し候、六時より御囃子左の通り

但番付は前もって相達し候也

一、弓矢立合 長上下 秋永何右衛門

一、高砂 一、東北 一、老松

（中略）

一、右同者の内、**本町鷹金屋源次儀**、当年まで**松囃子十五年出精**に付き、左の通り下し置かる旨にて候、御次下の間刀掛下え呼び出し、御小姓頭堤牧太より申し渡し、拙者も列座致し候、

本町 源次

源次儀松囃子数年出方懈怠なく致し候間、之を賞され、巻上下一具下し置かる

但御酒頂戴の内ニしらべ呼出候

右源次儀二つについては旧冬覚書をもって皆共より相達し、御紋付御上下、下し候埒に相成り候事

point③ 八代の人々と能のかかわり

八代城下町の人々が能衣装を寄進

『八代市史近世史料編』 御町会所古記之内書抜 上巻』

「寛政九年（1797）十月二日之曉城内出火以来御作事に付て寸志等」 町人からの能装束の寄付の記事

口上之覚

このたび、御移徒を祝いたてまつり、**御能衣裳**并丁銀、弓削清三・宮崎理兵衛・私共組合にて寸志つかまつりたく、存じたまつり候、尤も目錄は御会所え清三・理兵衛より差し出し申し候、恐れながら、この段、願ひ奉りたるべく、かくのござ候、以上

享和元年酉三月

唐木平次郎 印

（1801）

桑原茂兵衛 印

宮崎儀右衛門 印

上原・頼藤殿

乍恐奉願上口上之覚

このたび、御移徒を祝いたてまつり、いささかながら、**御能道具の内、土烏帽子セツ**、冥加寸志に差し上げ申したきため、恐れながら願いたてまつり候、右の段、よろしくお達しなられ、くださるべく候、以上

享和元年三月

本町一文字屋 萬次 印

横目 弥平次殿 印

丁頭 孫九郎殿 印

別当

弓削儀兵衛殿 印

上原右角殿

頼藤 栄殿

右御会所へ奉す

point③ 八代の人々と能のかかわり

八代城下町の人々が能衣装を寄進

奉願口上之覚

このたび、御移徒を祝いたてまつり、**御能衣裳**并御茶器品々代、別紙目録之通、恐れながら寸志差し上げ申したく、願ひあげたてまつり候間、願の通り、仰せ付けられそうらえば、有り難き仕合せに存じ奉り候、この段、よろしく成され、くださるべく候、以上

享和元年三月

原田喜三次 印

(一八〇一)

上原・頼藤殿

一、唐織 一 一、長絹 一

一、水衣 一 一、白大口 一

一、熨斗目 一 一、指貫 一

一、素襖 一 一、角帽子 一

一、唐団扇 一本 一、御茶器代書貫目

以上

三月

右願書三月二日会所え奉す

point③ 八代の人々と能のかかわり

八代城下町の人々が能衣装を寄進

奉願口上之覚

このたび、御移徒を祝いたてまつり、**御能衣裳道具**并文銭別紙目録の通り、恐れながら寸志に差し上げ申したく、願いあげたてまつり候、願の通り、仰せ付けくだされそうらはば、有り難く存じ奉り候、以上

享和元年三月

加勢屋清助

本郷半兵衛殿 印

上原・頼藤殿

覚

一、唐織 鬱金地花鳥模様 壺

一、長絹 紫地包花模様 壺

一、より狩衣 壺 一、大烏帽子 壺

一、尉髪 壺 一、赤頭 壺

一、黒頭 壺 一、編子大口 壺

一、腰蓑 壺 一、かつら 壺

一、太刀 一腰 一、長刀 一振

一、仕手床机 一脚 一、吹方床机 二脚

一、文銭壺貫目

以上

加勢屋 清助 印

右三月廿五日御奉行中え達す

point③ 八代の人々と能のかかわり

八代で能をやっていた人々（「八代郡誌」昭和2年）

仕手方

桜間左陣 桜間金記 芳賀源四郎

遠藤常精 丸山清之丞 亀山紀

遠山小十郎 蓑田作馬 西山栄太郎

西山勇次郎 藤本理三 濱茂三郎等

脇師

山田丹吾 宮山又次郎 成尾作蔵

種子屋勘右衛門 茶咲善兵衛

市原菊次等

地謡

宇野源太郎 弓削幸七郎 村山寛吾

皆吉武縄 平田道隆 藤田正脩等

太鼓

高田宅次 蓑田寛明 村上儀平

永原景清等

大鼓

藤本善作 桧垣清太郎 西山恵三郎

岩本久平等

小鼓

桑原周蔵 天野正業 今邑 中津則郷等

竹笛

栗田金次郎 岩本為吉 高木孝十等

狂言

村山忠三 村山仙蔵 栗田梅吉

勝野善三郎 丹後屋八兵衛 栗田彦次

岡本又吉 西山恵十郎 桑原菊平等

※桜間左陣：天保6（1835）～大正6（1917）

八代地域最大の秋祭り「妙見祭」に城下町から出される笠鉾が神幸行列に華を添える。笠の上に能に由来する人形を乗せたものが多い。（11月22日・23日）

「八代妙見祭の神幸行事」 国指定重要無形民俗文化財 ユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」



八代の人々も、能への愛着は高かったのでは？

出水神社の薪能



毎年8月第1土曜日

藤崎八幡宮の神事能



毎年9月16日

熊本の歴史ある地で、熊本の歴史が育んできた
世界が称える舞台芸術を見ることができる幸せに
ぜひ浴してください。

参考資料

- ・ 展覧会図録『仮面の系譜』八代市立博物館 1994年
 - ・ 展覧会図録『彩発見ーよみがえる江戸の装いー』八代市立博物館 1999
 - ・ 展覧会図録『武家の婚礼ー八代・松井家のお嫁入りー』八代市立博物館 2005
 - ・ 展覧会図録『松井文庫名品展Ⅲ 能面と能装束』 熊本県立美術館 1992年
 - ・ 展覧会図録『肥後松井家の名品』茶道資料館・相国寺承天閣美術館 2011年
 - ・ 展覧会図録『松井文庫創立三十周年記念 松井家の能』 国立能楽堂 2015年
 - ・ 展覧会図録『能楽伝承～熊本の能文化～』熊本博物館 2021年
-
- ・ 「寺社の祭礼と行事」『新熊本市史通史編第3巻近世Ⅰ』熊本市 2001年
 - ・ 「肥後の能楽」『新熊本市史通史編第4巻近世Ⅱ』 熊本市 2003年
 - ・ 『松井章之の江戸旅行日記』 八代古文書の会 2008年
 - ・ 『能・狂言事典』 平凡社 1987年
 - ・ 『岩波講座 能・狂言』 全7巻・別巻Ⅰ 岩波書店 1987年
 - ・ 『八代市史 近世史料編Ⅰ』 八代市教育委員会 1989年
 - ・ 『八代市史 近世史料編Ⅱ』 八代市教育委員会 1991年
 - ・ 『能 650年続いた仕掛けとは（新潮新書）』 2017年